

近, いままでどうもじっくりしなかった輻射と気象力学を結びつけることが最んに要望されているが, 輻射のシノプティック研究こそ, この要望にこたえる最良のものと思われる。そしてこの分野の発展は電子計算機を用いて始めて可能であろう。(勿論資料, とくに雲高, 雲厚などの雲の観測資料の欠乏が解決されることも必要である。)

赤外輻射の問題をより厳密に取扱うには, 輻射の吸収量を左右する透過関数というものを詳細に計算する必要がある。この関数の形は波長によって変る性質をもっているし, またその中に含まれる重要な因子である吸収線の中は気圧や温度によって変化する。また線の重なり工合でも吸収量は変化する。こういったものをすべて考慮

することは輻射図ではできないし, また手でやることは殆んど不可能に近い。Plass (1956) は 9.6μ の O_3 帯や 15μ の CO_2 帯が大気に及ぼす加熱冷却の効果を取扱う際, 以上の殆んどすべての影響を考慮に入れたが, 電子計算機 (MIDAC, IBM など) を用いて始めて可能だったのである。かゝる効果は特にオゾン層より上の大気の熱経済を取扱う際, どうしても考慮に入れる必要がある。

以上2つの分野をかんたんにのべたが, それだけでも電子計算機の効用ははかりしれないものがある。単に数値予報の分野のみならず他の分野にも充分活用させてもらいたいものである。さもなければ, 現在世界的レベルにある日本の気象輻射学もついに海外論文の紹介に窮々たる状態に落ちる恐れが充分ある。

学

界

消

息

1. 昭和基地の本格的観測始まる

宗谷丸からの輸送は2月5日頃終り, その後基地の観測準備は進み, いよいよ本格的観測が始まった。宇宙線, 極光, 夜光, 電離層などの高層物理に力が注がれ, 気象については高層観測も行われる。その他, 氷状, 海氷, 地磁気, 地震なども観測される。

2. 電子計算機動き始める

去る1月14日に電子計算器は計算機室に運び込まれ, 2月20日頃据付け, 調整が終る見込。その後, テストが行われ, 数値予報ルーチンの正式開始は4月1日の予定である。実施予定人員は27名で, 気象庁内外の利用にもできる限り便宜がはかられる見込である。

3. 研修所に高等部新設

昭和26年3月限り廃止されていた気象技術官養成所本科に担当する高等部が新設され, 来る4月1日から発足する。修業年限は2カ年で, 短期大学に準拠し, 気象の専門的知識, 技能および業務に必要な全般的知識を習得させ, 将来の気象庁主要技術職員としての人格識見を養成する。

4. 顔氏来朝

国連 TAA (Technical Assistance Administration) からの要請で, 台湾省気象所観測科の顔俊士氏が1月23日に来朝, 6カ月間農業気象について研修される。

5. 西日本の高潮

去る2月3日, 4日に西日本の太平洋岸で高汐が観測された。振巾は, 最大は名瀬で250cm, 多くの場所で数十cm, 周期は, 10~30分で, 経続時間は10~20時間であった。原因は不明であるが, 南西諸島の海底火山の噴火によるものかも知れない。

6. 堀口博士逝去

本学会の名誉会員, 堀口由己博士は去る1月17日岐阜県本巣郡の自邸で逝去された。享年73才。